

## 宮崎さん随想「忘れ得ぬ労使の人々」第20話番外編

「異能の人」 諏訪康雄 法政大学名誉教授・元中労委会長

1970年代、国際化の波が岸边までひたひたと押し寄せてきた。これまで高い障壁に守られ、いわば温室の中でぬくぬくしていた日本の企業にとって国際化とは何かいずれの企業も暗中模索であった。

これまで人材育成事業に携わってきた関係であろうか、上司から国際化に対応する人材育成について企画をするよう指示を受けたが、そうせつつかれてもドメスティック派を自認してきたので途方に暮れた。だが国際社会に即応できる産業人育成は、今や急務でなおざりにすれば日本の明日は無いと思い至りコンテンツの作成を急いだ。

国際化の進展に伴って企業が直面する事柄は一体何か？言語なのか、商習慣か文化か法律かあるいは宗教なのか様々な視点から議論を繰り返しながらカリキュラム編成に向けての手探りを続けた。

どうやら方向性が定まり具体的なカリキュラム編成に入ることとなり、この段階で外部の学者や専門家にも加わって頂きさらに議論を深めることとなった。



中諏訪先生・左清家先生

コンテンツを議論する若手学者として若杉敬明（東大）・石黒一憲（東大）・島田晴雄（慶応義塾大）・清家篤（慶応義塾大）の諸先生に参画をお願いし快諾いただき、具体的なカリキュラム編成に取り組む体制が成った。

会議の席上異能の学者がいるがぜひメンバーに加えて欲しい旨要望があり、お願いに伺ったのが諏訪康雄先生との最初の出会であった。先生は法政大学の新進気鋭の若手学者で舌鋒鋭く、これまで接した学者とは異なる雰囲気をもった方であった。曖昧さ

や論理構造が不確かな議論はことごとく論破し、メンバーが納得するまで論を尽くす熱い人であった。

多くの方々の協力を得て、ここに「経営アカデミー・国際コース」が創設され開講を迎えた。諏訪先生との交流が深まるに従い、単に頭のいい堅物の学者ではなく、専門以外の多方面の分野にも精通しておられる楽しい方であることもわかってきた。

国際関係・経済問題は言うに及ばず、学問以外の文化・芸能に至るまであらゆることに通じ、どこで、いつ仕入れてくるのか先生の持っておられる際限のない情報量に畏敬の念を抱いた。加えて歯切れのいい話術は聞く人を引き付けて離さず感銘を与える。

先生から例を聞いて異文化社会を強く意識した  
比喩がある。

当時オーストラリアの市民生活等を知る人は周  
りには誰もいなかったが、諏訪先生は豪州での  
客員研究員経験からオーストラリアでは“熱を  
出すと暖かい布団にくるまるのではなく水風呂  
に入れて熱を下げる、腹を下すとおかゆではなく  
肉を食べさせる”といった日本では考えられない  
異文化圏の話を具体的に面白おかしく言葉巧みに語られたのである。



左若杉東大助教授 右石黒東大助教授

これは事実なのか本当なのか、単に文化の違いを悟らせるための比喩なのか、先生独特の言い回しなの  
か、いずれにしても国際間に横たわる文化や生活慣習の違いとは、こういうことなのかと悟られ衝撃  
を受けたものである。

日本人の持っている社会常識や価値観は無論正しいことも数多いが、国際社会では日本とは真逆の考え  
や方法があることを諏訪先生の解説を聞いて納得したものである。

そして今まで国際社会とは“ぬえ”のように感じていたのだが次第に正体が明らかになってきたのである。

後年、国際コースの一期生である梁瀬行雄氏がオリックスの社長になった。同期生たちが祝う会を計画  
した。学者として高い評価を得ている多忙な諏訪先生と清家先生に駆けつけていただき一同をひどく感  
激させたものである。



諏訪先生の突出した才能

久しぶりの師弟の交流であつ  
たが、研修を受けた当時のス  
パルタ教育を懐かしく思い出  
し、時代の変遷を一同振り返  
りながら自社へ戻ってからの  
苦労話に花が咲き、座が湧い  
た。

清家篤教授・諏訪教授に羨ましさ感じたことがある。私はイタリアに強い関心を持ち、いつかイタリア語  
を自由に操れたらと内心想っていたのであるが、先生は大学卒業後独学でイタリア語を勉強したのだと  
人伝に聞いた。

国際コース OB 会前列右から

先生は後年ヨーロッパ最古の歴史と伝統を持つイタリアの名門ボローニャ大学へ客員教授となって赴任  
した。無論イタリア語で教鞭をとった。

イタリア語の発音はローマ字読みで十分ごまかせるが問題は文法である。

イタリアは名詞全てに性別が定まっていて語尾変化する、単数複数によって呼称が変わるし、冠詞の設定も厄介であるなど非常に難解である。

イタリア人相手に完全にマスターしたイタリア語を操り講義するとは驚きである。尊敬と羨ましさがないまぜとなり、先生の多彩な才能をこれでもかと思いつけられた思いがしたものである。

諏訪先生は多彩な活動を続けてこられたが法政大学で定年を迎え大学を去ることになった。

学者の世界の慣例である「退職記念講義（最終講義）」の日に招かれ拝聴した。仕事柄学者の最終講義は何度か聞いているが、法政大学の諏訪先生の場合は大ホールに400人を超える学生や聴講者を迎え盛大であった。テーマは先生の長年の研究主題の「キャリアと法」に関する講義であった

最終講義が終わると学生たちによって先生を送る壮行パーティーが用意されていた。

最終講義の後の記念パーティーは、初めての経験であった。諏訪先生はそれだけ学生に慕われていた証であろう。

最終講義を聞きながらひどく感銘を受けたのは、生産性本部が国際コースを創設し、今日のグローバル社会にいち早く対応したと生産性運動について触れていただいたことである。

最終講義には学生の他多くの人々が聴講していたが先生の盟友である慶應義塾大学の清家篤先生が忙しい中講義からパーティーまで諏訪先生を見守られていたのがとても印象に残っている。

大学退職後は中労委（中央労働委員会）会長に就任された。労使関係を運動の重要な柱と位置づけ所管する日本生産性本部事務局員にとって“中労委会長”とは雲の上の人といった存在である。

かつて労使紛争が深刻であった時代、日本生産性本部の副会長を務められた中山伊知郎一橋大学教授がその任にあり、経営者や泣く子も黙る労働界の大物が中山先生の下へ辞を低くして訪ねてこられた。まだ職員と言ひ条右も左も判らぬ若造の私は、この方は一体どういう方なのか遠くから眺めた。先輩職員から中労委会長とは雲の上の人だと説明され以来畏敬の念を深くしたものである。

諏訪先生が“中労委会長”を引き継がれると初めて耳にしたときは思わずエッ！と瞠目したものである。

勝手に親近感を抱いてきた先生がこんなに「偉い」方なのだ、世間はそうに評価している、これはいけないといたく自戒したものである。

私から見て先生の唯一首をかしげたくなる点は奥方にどうも頭が上がらないらしいと推測されることである。しかしよくよく考えると実は日本人にはなじめない“レディーファスト”という国際感覚を会得した諏訪先生ならではのこともかもしれない。

外国人が女性にコートを着せかけたり、椅子を引いて女性を腰かけさせたりする場面はよく目にする。若い時から国際感覚を身にまとい、そういう国際作法に通じ奥方に接しているかもしれないのに、こちらが邪推して”かかあ天下”などと思い込んでいるのかもしれない。

ある時日本の高名なオペラ歌手が一堂に会する豪華なイベントが六本木のサントリーホールで催され、テレビでしか見たことのない大物のオペラ歌手の打ち上げのパーティーに諏訪先生に家内ともどもお招きいただき大感激したこともあったが、異分野にまで通じておられることにまたまた驚かされた。

諏訪先生から「45歳は人生の折り返しで、ここからの人生はこれまでの続きではなく、転機である」と諭されたが、とうに45の坂を越えたが、いまだに過去をずるずる引きずりいつまでたっても転機を見いだせず、もがく身を恥じるばかりである。

先生とは互いに現役を離れてからも個人的にお目にかかる機会を頂いている。生産性本部で苦楽を共にした同僚を交え、3人がエスニック料理を賞味しながら懇談するのであるがこの席は楽しい。

時々幹事役を買って出る先生の会場設定はこれまた期待感が膨らむ。この場は単に美味しいものを腹に詰めるだけでなく、期せずして様々を語り合う場でもある。

ふと気づくと先生がメモを取っている。雑談ではあるが何か参考になるものがあったのかもしれない。先生独特の嗅覚がなせる業なのであろう。

一方こちらは最近ますます無精者になってしまい、いい話だったがあれは何だっけとジレンマに陥ることもしばしばである。

先生は法政大学を退職後、「キャリア研究会」を主宰され若い人を中心とした多くの方々と意見を戦わせながら今日に至るも研究を続けておられる。

先生は厚生労働省の労働政策審議会会長を務める等国の労働政策に深く関わってきた。公的な肩書を拝見すると、目のくらむような煌びやかさを感じるが、TPOを心得食事会などで

ご自身の専門分野の話やアカデミックな話はほとんどしない。メンバーの関心がどこにあるのか素早く察知しどんな話題にも乗ってくるのである。このような場面を繰り返し見ているうちになんと凄い方であるのか改めて感じるのである。異能の人はまた人間的にも深みを持っている。研究者には唯我独尊的な方が時々おられるが諏訪先生は長いお付き合いの中で極めて常識人の優れた研究者である。



左から大橋牧師中諏訪先生

少し横道にそれるが、生産性本部時代の同僚が定年になりプロテスタント教会の牧師になるために驚くべき努力を重ね、難解なヘブライ語のテキストを読みこなすなどの苦勞の結果「浅草北部教会」の牧師に就任した。

先生は牧師に請われるまま信徒を前に講演をした。イタリア語を自由に操る先生であり、信心深いイタリアの風土の中で過ごした体感であらうか、教会という特異な雰囲気の中で聞く話であったがT P Oを心得たいい話であった。

演題は「働くことについて考えてみませんか」であったが、信者は無論のこと、牧師である友人の説教を始めて聞きに來た私もつい引き込まれ神妙に聞き入ったものである。信心薄い異端の私であるが感動して信者に回す喜捨の箱にも過分な寄付をしたことを思い出した。

私は暇に任せ駄文を綴り人様へ無礼を顧みず勝手に送り付けたことがある。

100話を目標としたが、先生はその全てに目を通しその都度100回もの感想や私の間違がった思い込みなどを正された。功成り名を遂げた大学者のエネルギーのすさまじさに恐れ入り、改めて異能の人とは言えて妙だと認識を新たにしているところである。